

牧師室から (2022.2.6)

以前関西にいた時に、師事していたオルガンの先生より、公開レッスンを傍聴するのは良い学びとなるということを言われて、大阪市内のホールに北独から教授が来日した折に聴きに行ったことがある。確かに良い学びの機会となった。課題曲はロマン派のものであったが、参加した学生は演奏家の卵であり、レッスンは長く聴いていても飽きないものであった。その曲の一つにロイブケの『詩編94』があった。その作曲者は夭折した天才であったが、ペルゴレーシ（オルガンではないが）もそうだが、神様から人生にもう少し時間を与えられていたなら、もっと多くの人類の宝を世に残したであろうと思っている。

教授のコメントについては著名なオルガニストが通訳したが、演奏の技術的な面では的確に伝えていたものの、しかし曲の内容については気になることがあった。それは教授が、詩編94のテーマが「ラッヘ」(Rache) 即ち「復讐」であると言ったのを、「笑い」(Lache) と通訳してしまったのである。会場からは何も反応がなかったが、それからこの曲についての説明がちんぷんかんぷんになってしまったのである。何よりも詩篇について笑いというのがどうもぴんと来ない。

だからといってそのオルガニストを責めるわけではない。もともとその通訳者は演奏家であるので、クリスチャンであったとしても聖書に精通していなかったのに違いない。通訳にも、細かく言えばやはり専門分野というのがあるだろう。自分より能力がある人がいるところで、語ったり通訳したりするというのは、とてもストレスであり緊張するものだ。とにかく自分の専門分野以外には、あまり口出ししないほうがよさそうであると自戒した。 (つづく)

(鈴木淳一牧師)